
《P S P o 2 i》 Blessing of birth

もめん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《PSPo2i》 Blessing of birth

【Nコード】

N9879U

【作者名】

もめん

【あらすじ】

グラールに舞い降りた災厄を退ける英雄の所属する軍事会社『リトルウィング』

これは、そこに所属する一人の少女の物語。

注：この作品はほとんどが作者の自己満足によるものです。
一部に作者の自己解釈を含みます。
そういったものが嫌な方は>戻る<をクリックしてください。

プロローグ（前書き）

一応プロローグをば

まだ出ませんが一部のキャラに友人のキャラを使わせていたただいてます。

ですのでインフラとかであったとしても気にしないでください。

プロローグ

少女は立っていた、真つ赤な海の真ん中にかつて人であった物たちは純白の床に深紅を撒き散らし降り注ぐ雨のように肉と血が少女を濡らす。

少女にはもうなにも無かった。

怒りも、悲しみも、喜びも。

心の奥底に渦巻いていた憎悪すらも

深紅の瞳にはなにも映らずただ虚空をさまようだけその手を振りおろすたびに純白の髪は血肉で穢れた。

彼女は痛みすら感じずただただ惨劇を生んでゆく。

気がつけばそこには彼女しかいなかった。

あるのは肉で出来たガラクタの山だけ

それでも少女はその刃を振るい続けた

なにかに救いを求めるように

プロローグ（後書き）

次から本格的なお話です
駄文ですがどうぞよろしくお願いします。
では

いつもの風景&It・It ends with the start>t・

最初だけは投稿スピードが速いのです。

「ルチル！もう朝よ起きなさい！」

いつも通り、騒がしい友人の来訪で目が覚める。

毎度のことドアをしきりに叩くのは迷惑極まりない

これ以上五月蠅くされてはかなわないので炬燵から抜け出し扉へ向かう。

扉をあけると案の定金髪の少女ルナサがいた。

「おはよう」

そういつて笑いかけてくる

こいつには自分が迷惑な存在だとういう自覚がないのか

挨拶を返す気力も沸かない、しかも寝起きなので頭が回らない。

背は低く私と同じくらいしかない、年齢はわたしと同じくらいだろう。

ルナサがわたしを起こしに来るのはいつも通り。

だが

「なんで？」

ルナサの後ろに想像とは違う人物がいた。

確実にかがまなければ部屋には入れないであろう身長の大男

上半身は裸、醜い筋肉を激しく露出させている。

アキバ・アトライド・ジヨナサンそれがこれの名前。

「死ね」

そう言つてルナサだけを部屋に引き入れ扉を閉めてロックをかける。

「で、なに？」

ルナサも今日は私が仕事をしない日だと知っているはずだ。

それなのにあの馬鹿と一緒に来たのなら何かしらの理由があるはず。

「それがね、クラウチが緊急の依頼が入ったからって召集かけたのよ」

あのヒゲダルマ、人の休日は何だと思っているのだ。

今日はニューデイズの温泉に行こうと思っていたのに

「依頼の内容は移動中に説明するらしいから準備ができればマイシ
ップに集合、いいわね！」

いいわけないが仕事をすっぱかせばクビになる可能性もあるので行
かないわけにもいかない。

「わかった」

返事をした時にはすでにルナサの姿はなかった。

動きやすい戦闘用の服に着替えるとマイルームの外に出る。

居住区の通路に人影はなく、目の前にはシンプルと呼ぶにはあまり
にも無機質な床と壁が広がっていた

わたしの部屋は居住区の中でも最も奥の部屋なので移動には時間がか
かる。

つい数日前までは入り口近くだったのだが最近やたらに元気になっ
たエミリアが隣で大騒ぎするので部屋を変えてもらったのだ。

自分の足音を数分間聴き続けてやっとロビーにたどりつき、わき目
も振らずに転送装置へと歩く。

今回は緊急の特殊な依頼なので一応三人で登録してある仕事用のマ
イシップを使う事になっている。

転送が完了し仕事用のマイシップにつくとすでにアキバとルナサが
到着していて話をしていたようだった

ルナサはいつもどおりの服装、アキバもさすがに戦闘にまで裸で行
くほど馬鹿じゃない。

わたしが来たことに気付くとルナサが端末を操作してクラウチに通
信回線を開く。

「ああ？ やつと全員そろったのか？ ったくルチル！ お前いったい何
回」

「黙ってヒゲダルマ、そしてはやく説明をして」

いまわたしは非常に機嫌が悪い、となりでルナサとアキバが苦笑しているけれど気にしない。

「お前なあ、まあいいか今回の依頼はローグ스에 ジャックされた列車を取り戻してほしいとのことだ詳細な資料はメールで送っておいだ詳しくはそいつを見てくれ」

それだけ言ってヒゲダルマは回線を切った。

端末に届いていたメールに添付されていた資料を見る限りでは違法な商品くを運んでいた際に武装した集団に奪われたのだろう。

一部の者は列車から脱出したが奪われたものがものだけにガーディアンズには連絡できずこんな小さな軍事会社に依頼してきたわけらしい。

まあ、この三人が呼び出された時点であまりお行儀の良い依頼では無い事ぐらいはわかっていたが、久しぶりの反吐が出る仕事と依頼人の組み合わせだ。

特に列車に残された仲間についてまったく無関心なところが清々しいほどに下種な人間だ。

隣で資料を見ていたアキバも心底嫌そうな顔をしている。

「嫌な仕事だな、畜生」

初めてこれと気が合った、そのせいでさらに気分が悪くなる。

しかも今回はモトウブでの仕事、砂嵐が酷くてしかも熱い、さらに料理は脂っこくて好きじゃない。

ルナサは資料も確認せずに携帯ゲームやってるし

「はあ」

鬱だ……

目的の列車は今使われていない地下道に向かって走っているらしい。

その地下道で列車を止めて商品くを盗み出すつもりだろう、地下道の中には犯人の仲間がスタンバイしている可能性があるのだトンネルに入る前に車両内に侵入して武装犯たちを制圧し列車を

止めなければならない

その中で最もベストな侵入方法は、フローダーで上空から列車上部に飛び降りそのまま上部ハッチを開き内部へ侵入するという方法。説明するとアキバはこめかみをおさえて考えていたが二分ほど了承。

ルナサは話を聞いていないので無視

この作戦はルナサへのちよつとしたサプライズだ、資料も読まずにゲームをした拳句わたしの話を聞かなかった罪の重さを知るといい。

頬をなでる風が気持ちいい、この地域はすでに日が沈んだようで気温も低い。

風のせいでフローダーの操作が面倒なのが考え物だが。

そう、ただいま貨物列車上空を飛行中

「ちよつとルチル！こんな作戦聞いてないわよ！」

フローダーが足りないのでアキバの後ろに乗っているルナサが怒鳴ってくる

ふん、いい気味だ

「ルナサ！ルチル！俺の合図で飛び降りるぞ！」

おまえが主導権を握るな、わたしは命令なんかうけない。

大声で怒鳴るアキバの目に見えるように彼を嘲笑い列車の上に飛び降りる。

空中に投げだされる感覚、短いようで長い落下時間。

「おいっ！ルナサッ！俺達も降りるぞ！」

「え？ちよッ！」

続いて上がる悲鳴、楽しそうで何よりだ
ダンッ！

ここまで考えてからやつと着地した。

後に続くようにアキバとルナサが着地する。

わたしはともかく、この男は化物かなにか？

30メートルmの高さから並みの砲撃では傷すらつかないという硬い合金の上に思い切り着地、というか落下して平気な顔をしている。普通のヒューマンのルナサは痛みを堪えているせいで顔がすごいことになっているがきにしない

「侵入できるハッチはこの一つ後ろの車両だ、移動す」

アキバが言い終わる前にナノトランサーから愛用の大斧モラト・マキナスを取り出し思いきり車両に叩きつけると轟音と共に車両に大きな穴が開く

ふふん、ハッチなんて開けなくても中には入れるのだ。

「まったく、お前は無茶しかないな」

アキバが苦笑しながら穴から中に入る、その後ろでルナサはまだ足をおさえていた。

いつもの風景&It・It ends with the start>

中途半端に終わってしまいました。が次でバトル展開があります。
駄文ですがここまで読んでいただきありがとうございます。
では

狂いだす齒車&I t・T h e f u t u r e o f u n c e r t a i n t y

明日でいいやと思っていたらいつの間にか一週間もたっていたとは

振り下ろされたセイバーをかわし、振り向きざまに両手の大斧でその背中を殴り飛ばす。

小柄なローグスは吹っ飛びそのまま壁にダイブ、起き上がることはなかった。

これでこのフロアの敵は全滅させた、そろそろルナサ達が追い付いてくるころだろう。

「おい、独断専行はよせとあれほど言っただろう」

ドアが開いたため息をつきながらアキバとルナサが現れた。

「セキュリティに引つかかる方が悪い、足手まといは切り捨てるのが普通」

「あのなあ、天井に大穴開けてそのセキュリティを起動させたのはお前だろうが」

あっちの方が迅速に列車内に侵入できたのだから問題はない、何よりわたし一人でもこの程度のローグスは黙らせられる。

次の車両に移動しようと歩き出そうとすると、

「ちよつと待ちなさい、あんたスタンモードにできる武器持ってないでしょ」

ナノトランサーからテノラ社製の大斧、アंक・デッダを取り出したルナサが近寄ってきた。

また安物の武器を持ってきたなこいつは、この武器持ちにくいしデザインも悪いからなるべく使いたくないのに。

「わたしはこれで大丈夫、手加減くらいできる」

はあ、とため息をつくルナサが

「あんた自分の手に持つてるものとまわり見てみなさい」

わたしの手にあるのはスヴァルティアトマホーク、以前レリクスで偶然見つけてから気に入ってよく使用する大斧だ、大きさといい形状といいとても斧とは呼べそうにないが。

その次に周りを見るとうめき声すら上げられない大量の負傷したロ
ーグスの山、殺してはいないが少なくとも三カ月は動けない怪我を
しているだろう。

ルナサの方に向き直ると満面の笑みを浮かべてこちらを見てきた、
すこしこわい。

「わかった」

このままだと押し問答になる、ここは大人の私が引いてあげなけれ
ば。

「意外と早く言う事聞いたわね」

なんだ？そのいいかたは、それではまるで私が聞き分けのない子供
のようじゃないか。

そう思った矢先

「ルナサ、お前もだ」

手にG R M社製の大剣、カン・ウーをもったアキバが近付いてきた。

「は？何で私まで」

無言でルナサの手に持っているものを指さすアキバ。

その視線の先にあつたのはルナサの愛刀、コクイントウ・ホオズキ
だった。

ホオズキはニューデイズに古くから存在する伝承に記された刀、ら
しい。

ルナサが自慢げにそう言っていた、であるからして確実に私のモラ
ト・マキナス同様骨董品だ。

そのためスタンモードへの切り替えができない。彼女自身は峰打ち
だから大丈夫だと弁解しているが信用ならない。

何より先ほども列車に侵入してすぐに出てきた守衛を

「安心しろ、峰打ちだ」

とか言つて殴り飛ばしてたし、下手をすると峰で撲殺しかねないの
でアキバが半ば無理やりとりあげていた。

既にほとんどのローグスを鎮圧したが妙だ、あまりにも不自然すぎる。

「そ」

「それにしても妙だな」

私の台詞を奪いやがったこのやろうは、しかも私の言葉を遮ったことに気づいていない。

「なにがよ？」

ルナサも平然と話を続けやがって、いっぺんぶっ飛ばしてすっきりしようそうしよう

「ああ、それは　ツうお！？」

ちっ外したか、だが次は外さない一度振り下ろしたアंक・デッダを持ちあげずにそのままアキバの腹めがけて振りぬく。

今度はナノトランサーから取り出したダブルセイバー、クレアダブルスでガードされてしまった。

「殺す気かッ！」

「大丈夫、ちゃんとスタンモードのままだから死なない安心してなぐられてくれて構わない」

「スタンモードでも失神するくらいの衝撃は来るんだが！？」

とアキバとの割と本気な戦いをしているとルナサが

「もし仮にそいつで殴ったら失神してビクンビクンしてるアキバを見る羽目になるのよ？」

.....

「二人とも遊んでる暇はない、早く前に進まない」と

そんなのを見るのは死んでもごめんだもし仮に直視したとしたら正気を保っていられる自信がない

「はあ、さっきの戦闘が今日の戦闘の中で一番きつかったんだが」

「そんなことどうでもいいわよ、さっきの妙って何のこと？」

見るからに鬱になっている大男と呆れ顔で横に立つちびっこという状況が以外と違和感がない

確実なのはそのまま街に出たら幼女誘拐犯としてガーディアンズが警察のお世話になるだろう

「その件だが襲ってくるローグス達から殺意どころか敵意を感じないんだ。」

列車をジャックするほど大それた行動をとる者たちならば侵入者に手加減をするとは思えない」

あゝなるほど、とうなずいているルナサ。

気づいていなかったのか？そんなことあるわけ

いや、こいつならありうる。

それとアキバはもうひとつ見落としていることがある

「それにローグスにしては種族に統一感がなさすぎる」

これは明らかにおかしい事だ、確かに珍しくはあるがニューマンやキャストのローグスも存在する。

中には全種族が所属するローグスもあるだろう。だが、問題は所属する種族に偏りが少なすぎるのだ。

ここまで多くの種族が均等に所属する組織はガーディアンズくらいしか見たことがない

何よりガーディアンズは種族差別を廃止するために何十年という歳月を使い成し遂げたものだ

ましてやこんなならず者が種族差別をなくすにはかなり強い結束が必要になる。

「どちらにせよリーダー格をとつ捕まえて吐かせればわかることだ」
なんか最近リーダーシップ取るようになってきたなこいつ

「よつし、じゃあ張り切って行くわよ！」

「いや、もう次の車両で最後だ」

アキバが指をさした方向に敵は無く、今までとは違う小さめの扉があった。

おそらくあそこが制御室だろう。

さすがに細かい機器類が多く存在する制御室で斧を振るうわけにはいけないのでアंक・デッダをしまい代わりに取り回しのいいダガ

ーのラヴィスIIダガーを取り出す。

スタンモードにはできないが柄の部分で殴れば大丈夫だろう。

アキバはドアのセキュリティを解除しようとしていてこちらに気づいていない。

ルナサに軽く目くばせするとルナサも楽しそうににやりと笑い返してくる。

ルナサはその笑いのままドアに駆け寄りカン・ウーでドアを叩き斬る、わたしは真っ二つになったドアの残骸が地面に着く前に踏み倒し中へ突入。

一瞬だけ眼に映ったアキバのアホ面はなかなかおもしろかった。突入したまでは上手くいった。

後は華麗にリーダー格を倒すだけなのだが

どうしてすでに犯人たちが全員、倒れているのだ？

狂いだす齒車&It・The future of uncertainty

これはまた戦闘全然してませんね

別に面倒なんじゃないですよ？

まあ、その……ねえ？

隣り合わせの日常&It・The death is the usual&a

なんか投稿ペースがただでさえ遅いのさらに遅くなってる気が…

…

「で、何者かに昏倒させられていて何も覚えていないと？」

呆れたようにアキバが主犯格を問い詰めている。

「襲ってきたのが誰かも解らないのか？」

「そうだって言ってるんだろ！仲間の悲鳴が聞こえてからのことは覚えてねえよ！」

怒鳴り散らす男を睨みつけるとアキバが制するようにこつちをってくる。

「もういいじゃないの、これ以上やってても時間の無駄よ？」

ルナサの言うとおりだ、どうせ何を聞いても分からないのだからもう一度眠らせてもいいだろうに

それにしてもさつきから何か変な感じがする、体が重くなっていくというかなんというか

この感覚はどこかで感じたことがある気がするのだが思い出せない。

まあ、いいか

「ならばなぜ俺達を襲ってきた」

いやよくない、たしかこの感覚は……

ふと、視界の端に機器系統が映った。

そのメーターが示す速度は、先ほどよりも上がっている？

「ルナサ！ブレーキをかけて！」

「え？ああ、わかった」

ルナサは戸惑いながらもレバーを下げ、ブレーキをかけようとする

「あれ？おかしいわね」

予想通りブレーキはかからなかった、やはりコントロール系統が奪われている

「なにをした」

ナノトランサーから取り出したラヴィスⅡダガーを男の首に突き付け静かに問いかける

「し、知らねえよ！俺はずっとあんた等に見張られてんだろうが！」

「第三者が介入した可能性が上がったな」

この男の仕業でないとするとそれいがいには余り考えつかない

「コントロール系統を奪う時にどんなものを使っただ？」

会話だけで状況を察したのであるうアキバがさらに問いつめる、思い当たる節があるのか男は顔色を変えて黙り込んだ。

「早く言え！このまま全員で肉の塊になりたいのか！」

久しぶりにアキバがキレていた、さすがに状況が状況だからか。

「デリラ・グリーナだよ、貨物フロアの奥の内部ハッチに設置した」
よりもよって一番奥の車両か、ここから七車両先でおそらく敵は居ないだろうから移動時間はそうかからないだろう。

だが、たしかこの列車の貨物フロアには防衛用に大量の中型マシンリーが配備されていると資料にあったのを見た

もしコンピュータと列車がリンクしているなら厄介だ、破壊するのはできないわけじゃないが時間がない。

「ルチル、あとどれくらい持つかわかるか？」

スピード、距離からしてトンネルまではあと

「最大で二十七分が限界だと思う」

マシンリーの戦闘力にもよるがまともに戦ったらデリラグリーナまではたどり着けないだろう。

「つまり早急にマシンリーを突破し、デリラ・グリーナを破壊しないと俺達はこの列車とともにめでたく瓦礫の中つてわけだ」

アキバは相変わらず物分かりがいい、ビーストにしては上出来だ。

だがその金髪ヒューマン、資料を見ていないから仕方ないがその余裕の表情を今すぐやめろ。

「クソッ！こんなの聞いてないぞ！」

ダブルセイバーのクレアダブルスで自律行動するユニットを弾きながらアキバが叫んでいる

まあ、その気持ちはもっともなのだが

貨物警備用大型マシナリー、ヴォルナ・グラフカ。

まさか、連中の運んでいた商品がこんな代物だったとは思ってもよらなかった。

知り合いの情報屋が話していたのを少し聞いたただだが試作品を盗み出していたとは、依頼主の方もまさか第三の勢力が介入してくるとは思っていなかっただろう。

「ああッ、こんな装甲厚いんじゃないじゃないのよ!」

さきほどまで悠々と走っていたルナサもこんな妨害が入ると思わず微妙にキレ気味だ。

「ルナサ!こんなのが相手じゃ俺達は分が悪い、俺達はルチルのバックアップにまわるぞ!」

クレアダブルスをしまい代わりにGRM製ツインハンドガンのオブシディアンに持ち替えたアキバが怒鳴りながら駆け寄ってくる。

「いいか、俺達の目的はこいつを破壊することじゃない」

「突破すること、でしょ?」

口では言えてもここまで巨大なマシナリーに十分やそこで足止めできるほどのダメージを与えられるとは思わない

レオル・バディアなどの戦闘経験のある的であれば十分もかからずに破壊できるがいかにせんこいつは未知数だ、行動パターンの分析に攻撃手段の把握。

すべて終えてから戦い始めるのでは遅い、だからと言って戦いながら分析できるほど楽な敵でもなさそうだ。

つまり、最も確実に最も危険な方法をとるしかない。

「だからルチル、俺達がバックアップするから」

アキバは一度言葉を切り、シンプルかつ効果的な作戦を告げる

「全力で叩き潰せ」

「了解」

小難しいのは好きじゃない、やはりこういうシンプルなのが一番しっくりくる。

タイムリミットはあと十九分

アキバが提示した作戦は至極簡単で最も馬力のあるわたしがヴォルナ・グラフカを破壊、もしくは足止めしアキバとルナサはバックアップを行いながらヴォルナ・グラフカを大きく迂回するルートでディラ・グリーナが設置してあるフロアに移動。

だが問題があった、このマシナリーと貨物フロアはリンクしているらしく床に電流を流すせいでルナサとアキバが分断され防戦一方にされ

さらにフロアの床そのものを回転させているせいで思うように動けない、おそらくディラグリーナを暴走させた何者かが侵入者の撃退ではなく足止めの優先をプログラミングしたのだろう。

そのせいで負けることはないが勝つのも難しい状況を作られてしまった。

こう考えている間にも自律ユニットがしつこく攻撃を仕掛けてくるし床にも電流を流されるから面倒なことこの上ない。

だがこのマシナリーはかなり多機能にようだが、目立った戦闘用の武装が存在しない。

つまり直接的な戦闘力が低いというわけだ、装甲も厚いといえば厚いがあと二、三発本気で打ち込めば破壊出来るだろう。

このペースならばギリギリで間に合うだろう、そう思いながら跳躍しモラト・マキナスをヴォルナ・グラフカの側面に思い切り叩きつける。

その衝撃で鋼鉄の巨体が大きく揺れそのまま動きを止めた。

「やったのかしら？」

「分かん、だがこれはチャンスだ今のうちに次のフロアへ向かえ！」

アキバがルナサに向かって指示した瞬間、黄色く発光していたヴォルナ・グラフカに取り付けられていたランプが真っ赤に変わり突然動き始めた。

そして後部のプラグ型の端末と腕部についていた杭のようなものを

を床に突き刺して何かを始めている。

そして床を流れる電流がすべて止まり、代わりにフロアの端を電流が流れ始める。

まるで、ヴォルナ・グラフカの突き刺したプラグに向かうように

「充電、してる」

思わずつぶやいてしまった。

エネルギーを列車本体から吸い上げているのだ、エネルギーを集めているという事はそのエネルギーを使って何かしらの行動を起こすはず

「ルナサ！伏せるッ！」

最初に変化に気がついたのはアキバだった。

側面からは見えにくかったがヴォルナ・グラフカがルナサの方向を向いたのでやつと状況を理解した。ヴォルナ・グラフカはその巨大な体の中央にあたる部分を開いていた。

そして、そこからはエネルギーを帯びた巨大な砲塔が伸びルナサへと照準を合わせる。

ルナサがアキバの声に気が付き振り向いたときにはすでに遅くヴォルナ・グラフカはため込んだエネルギーを放出していた。

瞬時の判断で体をかばうようにコクイントウを前に掲げた瞬間、彼女は光に押しつぶされた。

破壊された床の破片と舞い上がった塵のせいで視界が曇る。

方向感覚を失いながらも気配をたどってルナサのもとに行くとアキバがルナサを抱えて片手だけで二基の自律ユニットと戦闘をしていた。

駆け寄って射撃をしていた方のユニットにモラト・マキナスを叩きつけるとユニットは吹っ飛び壁に激突した。

「ルナサの様子は？」

アキバもユニットが一時的に本体の方に戻ったのを確認するところ

らに向き直る。

「重傷だ、少なくとも今回はもう戦力としては期待できないだろう」
「やっぱりか、わたし一人ならルナサはにおいて戦闘を続行するところだがアキバは平然と仲間を見捨てられるほど腐った人間じゃあない。ならばルナサをアキバに任せてわたし一人で戦うしかないだろう。すでにタイムリミットは二分を切っている、急がなければ。」

「ルナサは任せた、後は私がやる」

「おい、ルチルッ！」

ヴォルナ・グラフィカはこちらに気づくと体をこちらに向けそのまま巨体で押しつぶそうと突進してきた。

突進をギリギリでかわし、比較的装甲の薄い場所である先程砲身が現れた体の中央部めがけてモラト・マキナスを振り下ろすように投擲した。

巨大な鉄塊は装甲を突き破りヴォルナ・グラフィカの内部へと刃をとどかせる。

この衝撃によりヴォルナ・グラフィカは一時的に停止し隙が出来た、ヴォルナ・グラフィカが停止している間にディラ・グリーナの設置してある車両へと走りナノトランサーから取り出したスヴァルティア・トマホークで扉を破壊した、その瞬間背中に焼けるような痛みが走る。

倒れこむ寸前に頭だけ振り返って後ろを見ると電気をまとった自律ユニットが見えた。

油断していた、段々と視界が暗くなってゆく。

自律ユニットがそのままわたしの体突き刺そうとこっちに向かってくる

そして、横から飛来した弾丸に貫かれ爆散した。

さらに立て続けに打ち出される弾は隣のフロアのディラグリーナをも貫き破壊する。

この中で実体の弾なんて酔狂なものを使うバカなんて決まっている。
「どんなもんよ」

声のした方向を向くと、アキバに抱きかかえられながらも、
傷だらけの顔で自慢げに笑いかけてくる金髪の少女の姿があった。

隣り合わせの日常&It・The death is the usual&a

一話の内容がこんなに長引くとはおもいませんでした。
最初は一話で終わるはずだったのに……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9879u/>

《P S P o 2 i》 Blessing of birth

2011年11月15日15時52分発行